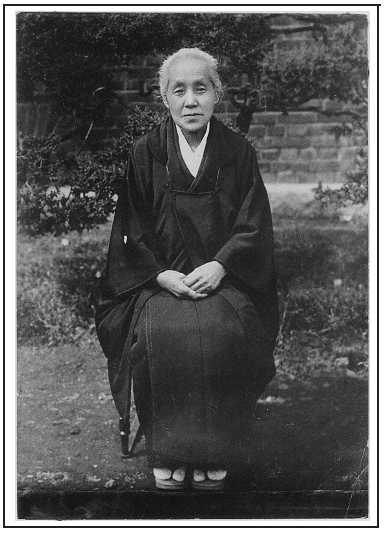
2011 年 5 月 30 日　花巻東高等学校

淵澤能恵と淑明学園

姜　奉　植（カン　ボン　シック）

1. 淵澤能恵と『淵澤能恵の生涯』が出版されるまで

<村上淑子著『淵澤能恵の生涯』pp.4-7，高橋寛の「出版を祝う」より引用>



…　…　…

ご案内のとおり，淵澤能恵は岩手県石鳥谷町の人であります。嘉永 3 年（1850 年）八重畑村（現，石鳥谷町）関口に生まれ，生後 9 ヵ月で土澤町（現，東和町）の濱田新次郎の養子となり，29 歳のとき，渡米遊学し，洗礼を受けてクリスチャンとなり，明治 15 年（1882 年），養母のたっての願いで帰国。しかし，向学の志止み難く，同年，同志社女学校に入学するも，3 年で中退。その後，東京，下関，熊本，福岡の女学校の教壇に立ちました。

明治 37 年（1904 年），養母永眠。翌年，知人の誘いで韓国に渡り，彼の地の女性の実情を見て，余生を韓国女子教育に捧げる決意をしました。

ときに能恵 55 歳でした。能恵は明治 39 年（1906 年），「明新女学校」を*創立*。学校長に李王朝の李貞淑を迎え，自らは学監となりました。後，「淑明高等女学校」（現，淑明女子中高等学校の前身）と改称。能恵も理事長として活躍し，韓国女子教育の礎を築きました。

また，日本の朝鮮政策に抗する反日運動のさなか，「日韓婦人会」活動をとおして，日韓融和に努めるなど，その功績は大きく，大正 4 年（1915 年），「従七位勲六等宝冠賞」を贈られました。そして昭和 11 年（1936 年），永眠。齢 86 歳でした。

以上が能恵の生涯の概略であります。とりわけ平均寿命 50 歳前後であった明治期，齢 55 歳にして海を渡り，異国の女子教育への挺身を決意し，学校を*設立*するといったことは正に壮絶な人生であり，「韓国女子教育の母」と呼ばれた，その功績は郷土の偉人として顕彰するにふさわしい人物であります。しかし，能恵はふるさとでは忘れられた存在でありました。その足跡は生家の菩提寺に「淵澤能恵の墓」がただひっそりと佇むのみでありました。

この能恵に光を当てたのが村上先生と先生が代表する「石鳥谷花の会」であります。

私が岩手県立図書館長時代に調査収集した資料をもとに，能恵を紹介したのがきっかけとなり，先生と「花の会」のメンバーが立ち上がり，文献調査，関係者訪問などを重ね，ついに*能恵が創立した*，韓国の「淑明女子中高等学校」を訪問するなど，その調査研究活動は真剣そのものでした。しかもこれらの活動に要する費用はすべて自弁。行政の補助も団体からの支援も仰ぐことなく，一切は会員の懐を痛めたものでありました。

「埋もれている郷土の偉人に光を当てたい」……この一心で活動する村上先生と「花の会」メンバーの姿に何度胸を熱くしたことか。やがてその努力は平成 14 年，報告書「淵澤能恵　−韓国女子教育の礎を築いた人−」のリーフレットとしてまとめられ，発刊されたのであります。

その反響は大きく，地元紙「岩手日報」が，「岩手日日」が，「地元テレビ局　テレビ岩手」が大きく報道しました。特に「テレビ岩手」は『淵澤能恵　五十五歳で海峡を渡った』を制作しました。そしてふるさとの人々も目を大きく開けることになりました。

また行政当局もその価値を高く評価し，石鳥谷町の図書館に「淵澤能恵コーナー」を設置し，パンフレットを作成しました。そして町内の学校や公民館などに配布しました。こうして能恵の生涯と功績を衆知させる努力が始まりました。

さらに能恵の出身地の小学校では総合学習の時間に村上先生を招き，学習を重ね，その成果を演劇にまとめて学校公開研究会に発表しました。また能恵の出身地の人々を中心に町内の有志が「淵澤能恵を顕彰する会」を立ち上げ，能恵の生誕地に碑を建立しました。さらに 2005 年 11 月には「淵澤能恵没後 70 周年記念事業」を企画するなど，新しい動きも生まれております。

このような動きが生まれましたのも，村上先生をはじめ・花の会」の活動があったればこそのものであり，先生とメンバーの活動の価値の大きさには計りしれないものがあります。

今，先生の著書が出版されますことは・淵澤能恵の偉大さをふるさとの人々のみならずより多くの人々に知らしめることであります。

さらに，多くの人々に淵澤能恵の生涯と功績を再認識させて，郷土の偉人として永遠に位置づけることに寄与することでありましょう。

日本が大韓帝国の支配権をめぐる日露戦争に勝利し，実質的な日本の韓国支配が色濃くなった1905年5月，淵澤能恵は55歳で，韓国に渡る。

渡韓後，韓国皇室の高宗皇帝の後妻である厳皇貴妃の支援を受け，貴族の李貞淑と共に，「明信女学校」の創立に貢献した。そして，没するまでの30年間を，唯々近代化に立ち遅れた韓国の，それも朝鮮の近代女子教育のために奉職し，敬虔なクリスチャンとして人生を貫き通す。淵澤能恵の没後3年にあたる1939年に，「明信女学校」，後の「淑明高等女学校」が，淵澤能恵の生前の念願であった「淑明女子専門学校」として開学する。戦後の1948年には，この「淑明女子専門学校」が四年制の「淑明女子大学校」に昇格する。今日まで「淑明女子大学校」は，韓国屈指の名門女子大学として存続し，多くの優れた女性を韓国社会へと送り出す。

このような淵澤能恵の功績は，これまで日韓両国でほとんど知られてこなかった。戦前においては「朝鮮女子教育の母」，また，「内鮮融和の母」と謳われた淵澤能恵の人生と足跡を，本フォーラムで辿ると共に，ここではこれまで紹介された「淵澤能恵」に関する主な出版物他の資料をまとめる。

＊淑明学園の沿革

1906 年 「明新女学校」を創立（4 年制）
1908 年 「明新高等女学校」に改称（本科 3 年制，予科 2 年制）
1909 年 「淑明高等女学校」に改称
1911 年 第 1 次朝鮮教育令第 229 号により「淑明女子普通学校（予科 4 年制）」と「淑明女子高等普通学校（3 年以内）」に改編。
1936 年 「淑明女子専門学校創立準備委員会」発足
1938 年 「淑明高等女学校」に改称
1939 年 「淑明女子専門学校」を創立
1946 年 「淑明女子高等普通学校」が「淑明女子中学校」に改編（6 年制）
1948 年 「淑明女子専門学校」が「淑明女子大学校」に昇格
1951 年 「淑明女子中学校」が「淑明女子中学校（3 年制）」と「淑明女子高等学校（3 年制）」に分離改編

＊淵澤能恵に関する主要出版物

①報告書「淵澤能恵 ―韓国女子教育の礎を築いた人―」石鳥谷花の会編集委員会著，石鳥谷花の会，2002年7月20日，総26頁
②『淵澤能恵の生涯 ―海を越えた明治の女性―』村上淑子著，原書房，2005年12月2日，総173頁
③韓国語翻訳本『후치자와 노에의 생애（淵澤能恵 の 生涯）』村上淑子著，姜奉植訳，현학사（ヒョンハク社），2009 年 6 月 5 日，総 211 頁
④会報「淵澤能恵通信」淵澤能恵を顕彰する会

＊淵澤能恵に関する主要報道

①「東北女人三代 淵澤能恵」河北新報，1968 年 4 月 4 日
②テレビ放送「能恵は55歳で海峡を渡った」（30分），テレビ岩手，2003年5月3日放送
③「教育開いた淵澤能恵」岩手日報，2005 年 1 月 30 日
④「淵澤能恵の伝記翻訳」岩手日報，2009 年 7 月 4 日
⑤「淵澤能恵の顕彰活動」岩手日報，2009 年 9 月 3 日
⑥「『淵澤能恵の生涯』韓国語翻訳本の紹介記事」『지방의 국제화（地方の国際化）』，2009 年 10 月号

2. 淵澤能恵と明新女学校の創立

淵澤能恵は，若い時，福澤諭吉著の『西洋事情』や『学問のすゝめ』などを熟読していたと言われ，西洋への関心を抱き，また啓蒙思想の影響を受けていたようである。淵澤能恵は，29歳（1879年）の時にアメリカに渡って苦学をしながらキリスト教に入信し，洗礼を受けてクリスチャンになった。32歳の時，養母の要請で帰国をするが，間もなく同志社女学校に入学して新島襄の薫陶を受けた。35歳の時，同志社女学校を中途退学し，東洋英和女学校で教鞭をとり始めて以来，数ヶ所の女学校で学監や教師をしていた。

1905年5月，55歳の淵澤能恵は，岡部長職夫人抵子の誘いで韓国に渡り，韓国皇室が設立に乗り出した近代女子学校の創立に大きく貢献することになった。1906年1月，韓国皇室の厳皇貴妃を総裁とする日韓婦人会が結成され，同年5月，明新女学校が開学されるが，日韓婦人会と明新女学校との間には密接な関係があったと見られる。日韓婦人会の総裁は厳皇貴妃で，会長は貴族の李貞淑，総務は淵澤能恵であったが，この3人は，明新女学校の創立にあたり，厳皇貴妃は学校の敷地の提供や財政上の支援を行っており，李貞淑は校長に，淵澤能恵は学監に就任していることからもその深い関係が窺える。

厳皇貴妃は，アメリカの宣教師たちが先駆けて設立した，韓国最初の近代の男子校と女子校と言われる培材学堂（1885年設立）と梨花学堂（1886年設立）の他，外国人による学校設立に刺激を受け，近代教育，特に女子教育の必要性を痛感し，近代学校の設立や運営のために，厳皇貴妃の御所である慶善宮からの支援を惜しまなかった。その良い例が，明新女学校への創立支援であり，厳皇貴妃の弟の厳俊源が設立した進明学校（1906年設立）への支援や厳皇貴妃の親戚の厳柱益が設立した養正義塾（1905年設立）への支援である。厳皇貴妃から支援を受けた，この3校は，当時，ヤンバン学校と言われており，特に明新女学校は貴族学校と呼ばれていたと言う。

淵澤能恵は，明新女学校の創立にあたり，具体的にどのような貢献をしたかについては明らかになっていない。創立後は，学監として教育と教務及び学校の運営まで任されており，校長は生徒募集と学校全体の監督をしていたと言う。創立したばかりの学校を軌道に乗せるために，まさに二人三脚の協力体制で頑張っていたのではなかろうか。

淵澤能恵と李貞淑は，学校をどんどん発展させていき，1909年に校名を淑明高等女学校に改称し，韓国名門女学校「淑明学園」を築き上げた。淵澤能恵は，平素から最高の高等教育機関である女子大学まで創設したいという気持ちを持っていたようであるが，叶わず晩年には自身の亡き後の女子高等教育機関の創設を松本雅太郎に託して1936年2月，86歳を目前にして息を引き取った。

3. 淵澤能恵と淑明女子専門学校の創立

淑明女子高等学校の沿革によれば，「淑明女子専門学校創立準備委員会」は淵澤能恵の没年12月に発足したと言う。当初の設立計画では，淑明女子高等普通学校を拡張して1938年春に開学する計画であった。しかし，その後，朝鮮総督府と設立について交渉を行った結果，校舎を京城の郊外に新築することになり，設立計画の規模が当初の構想より膨らんでいったと言う。

それで新校舎の敷地は李王より下賜されることになったが，校舎建築費及び設備費などの経費で 35 万圓を要していた。この中の 20 万圓は淑明学園側から捻出することになったが，残りの 15 万圓については調達の目途が付いていなかったようで，1937 年 3 月 6 日に開催された第 1 回淑明女子専門学校創立委員会でこの 15 万圓の調達方法について話し合

われた模様である。

この委員会でか，それともその後の委員会でか，は定かでないが，朝鮮日報によれば，この年の春，朝鮮総督府に淑明女子専門学校設立のための寄附金の申請を行ったと言う。それから1年後の5月，朝鮮総督府から寄附許可の指令が下りたのである。

ところが，当時は日中戦争の真っ只中にあって，戦争を後方支援していた朝鮮総督府は財政が逼迫していたにもかかわらず15万圓という大金を一私学建立のために寄附を許可したということは，にわかに理解しがたい，謎めいた話である。

ここで朝鮮総督府からの寄附金の謎解きを試みたい。

1つは，1919年から1927年までと1929年から1931年までの約10年にわたり，朝鮮総督を勤めた齋藤實とその夫人の春子，それに淵澤能恵という3人の人脈関係が大きく働いたのではないかと推察する。齋藤實は陸奥国水沢出身で淵澤能恵とは同郷の岩手県出身であるし，春子は，淵澤能恵が若い頃，在職していた東洋英和女学校に学んだことから師弟関係に近い尊敬の念を抱いていたのではなかろうか。このような関係から齋藤夫妻と淵澤能恵は交流をしており，その親しさが文通でよく表れている。

もう1つは，この3人は，3人とも当時としては大変珍しい，英語が堪能な国際人であり，リベラリストでもあった。またキリスト教信者か，もしくはキリスト教に理解を示している点でも共通している。

なお，齋藤實は，1919年，朝鮮総督に赴任してそれまでの武断政治から文化政治に施政を果敢に転換し，朝鮮人同化や懐柔政策の一環として内鮮融和を進めたことで知られている。1922年には，第二次朝鮮教育令を公布して朝鮮でも法的に大学設立を可能とし，2年後には京城帝国大学が設置されるなど，朝鮮における高等教育政策を前進させた総督でもある。この文化政治や内鮮融和および教育に対する前向きな姿勢も齋藤實と淵澤能恵は共通している。

淵澤能恵は1936年2月8日で天寿を全うするが，18日後，齋藤實は2・26事件で凶弾に倒れる。それから約1年後，春子夫人は「淑明女子専門学校創立委員会」の委員として表に登場するが，この登場は，教育における内鮮融和を長年にわたって誠心誠意実践し，女子高等教育機関の設立を念願していた淵澤能恵に対する，尊敬の気持ちと故人の遺志をついで実現させてあげたいという一種の使命感の表れではなかったのであろうか。

一私学の創立委員会が，篠田治策李王職長官を委員長とし，元総督夫人をはじめ，中枢院の参議や銀行の頭取，元総督府学務局長らが委員という布陣をしていた。このように植民地朝鮮の政・官・財・教育界から錚々たるメンバーたちが集められたのは，元朝鮮総督夫人の春子の呼びかけなくしては実現できるものとは考えにくい。齋藤春子自らが創立委員になって淑明女子専門学校の創立を全面的に支援したと考えるのが妥当ではなかろうか。

淵澤能恵は，生前，自身の退職金1万圓と財産一切を淑明女子専門学校設立のために寄附をするとの遺言を残して亡くなった。3年後の1939年4月1日，淑明女子専門学校は，家政科（40名），技藝科（40名），専修科（50名）の3学科を有し，新入生130名で華々しく開学をした。

＊淑明女子専門学校創立委員会（1937年）
委員長　篠田治策
委員　林茂樹，丹羽清次郎，渡邊豊日子，柳楽達見，武者錬三，宇佐美勝夫，松山常次郎，松野瀧野，松本正寛，小林源六，有賀光豊，浅野太三郎，齋藤春子，城後信吉，関屋貞三郎，朴榮喆，張憲植，韓相龍，金漢奎，金性洙，閔大植，
委員　幹事長　小田省吾
委員　幹事　野村盛之助，松本雅太郎，李起爽・金永煥（職員代表），金縣實・李淑鍾（業主代表）